

ずに、絶えず發達進歩を圖るといふことで、其心さへあれば、不愉快なしに日が送れて、其上いつか希望の達せられる時機が来る。

いくらよい機會が舞込むて來ても、こちらにそれに應ずる準備が出來てゐなければ、機會は待つてゐてはくれない、捕へ損ふ、いつでも來いといふやうに、仕度を充分して置くがよい。

朝鮮の俚諺

(帝國文學)

△幼い子供の言葉も耳から逃すな。

畫に志す人は何物にも注意を拂つて自己のものとするがよいスケッチブックは絶えず手から放すな。

△下手な料理人は朴の木の俎板を怨む。

△甘く行かない時には先祖にかづける。

紙の故にする、繪具の故にする、筆の故にする天氣の故にする、教師の故にする。但よく出來ただけは自分の故にする。

△澁い梨でも噛みしめて見るものだ。

辛抱して畫いてゐると、出來損いと思つた繪が存外面白いものになることがある。

△釜の中の豆も煮てこゝ熟す。

一寸やつて見て飽きてしまつてはいつ迄たつても生煮だ、よく熟すまで續けるがよい。

△馬鹿にした草で目を突く。

△狎れた斧にも足を截る。

こんな處々と輕々しくかゝると却て甘いものが出來ない、獅子は兎一匹にも全身の力を用ひるといふ。

△花鉢に植ゑると描ヂャラシも植木だ。

額縁に入ると出來損ひも繪になるかネ。

△横這ひに往つても京城迄往かれればよろしい。

描法なんか構ふな、目的さへ達すればよい。

△十二の才藝のある奴が朝夕の煙を立てかねる。

何でもやりたがるものは一事も成功しない。

△狂人が虎を捕へる。

向ふ見ずにやる奴も時として傑作が出来る。

△虎の居ない時には狐が先生。

田舎へゆくと狐のやうな大家が澤山ある。

△烏が十二の聲音を弄しても一つとして善い語はなし。

もと／＼才分の無いものがいくら骨折つてもよい畫は出來まい。

△瓦一枚惜むで棟木を腐らす。

少しの繪具を惜むで其繪は出來損ひ。

△空を掠めて往く鳥も初め體を動かしたればこそ飛べるのだ。

いきなり上手に描けるものではない。

* * * * *

